

「現象学的心理学」って何？

今回は「現象学的心理学」という、古くて新しい心理学のご紹介です。

ぼんやりとしかわからない何かがあるとします。その、ぼんやりをそのままに捉え、はつきりとわかるようにしていくのが「現象学」です。

そこから生まれた心理学が、「現象学的心理学」という心理学です。

現象そのものを出発点として、つまり、あなたの目の前に現れているものを、あなたの視線で捉えることから、出発します。でも「私は、このように捉えた」と言うのと「それはあなたの思い込みではないのか。単なる主観でしよう」と言われてしまいそうですよね。

科学の進歩に伴って、客観的データが重視され、心理学の世界でも、長い間、客観的であることが、学問であることの条件だと考えられてきました。ところが最近、客観的であること

が、改めて問われるようになってきました。

たとえば知能指数は、人間の側面である知能を、数値で把握しようとするものです。知能指数が135以上は、かなり優秀、60を切ると、普通学級で勉強するのは困難と言われます。

目の前のものをそのまま捉えることが、真理への出発点

実は、この知能指数を測定するための検査にも、様々な種類があります。何を知能であると考えるかによって、検査のやり方も、数値の計算の仕方も違います。ある検査では、その人が最も安定した時に発揮できる能力を測定しようとし、また、ある検査では、不安定

な状況下でもその能力を発揮できるかどうか、その人の能力のひとつとして測定しようとしています。

知能を何であると考えかは、既に、その知能検査を作った研究者の主観が反映されています。

そこで考えると、「知能指数」というものが、本当に知能というものを客観的に表しているのか怪しくなってしまう。

また、知能指数の同じ子どもが、同じ能力を発揮するとも限りません。

私たちは、数値に置き換えられたもの、客観的と言われるものが、実は万能でないことを、体験的に知っています。

客観的である、ということ、多くの人から共通の理解を得られ、納得してもらえるという利点があります。その一方で、大切なもの人らしさが、数値化できないという理由だけから、切り捨てられていることも珍しくありません。

このように、日頃私たちが、相対するものとして考えてきた「客観的なもの見方」と、「主観的なもの見方」を、現象学的心理学では、次のように捉えています。



子どもが、オニにみつからないように、何かの陰に、自分の体をすっぽり隠しています。この時、この子は、どこにいたら、オニから自分の体が見えないかを、想像して隠れています。

「頭隠して尻隠さず」という隠れ方をします。自分からオニが見えていなければ、オニからも自分が見えないと考えているのです。これは、自分の視線と、相手の視線があるいは、主観的視点と、客観的視点と、区別できていない段階です。大きくなり、オニの視線を

想像できるようになっても、オニの視線で実際に見ているわけではありません。自分からオニがどのように見えるかを手がかりに、オニの視線を想像しているだけです。

このように考えると、私たちがもっている、2つの視点、主観的視点と、客観的視点は、実は、すべて、私からの視点、つまり、主観的視点を出発点にしているのだと考えることができます。

私たちは、「客観的に考えると」「客観的にみて」ということを言い、そこでは、主観的な思い込みをはさまないで考えているつもりですが、実際には、主観的視点から出発して「外から見る」と、こんな風に見えるに違いない」という順番で客観的

な視点を獲得することになります。

目の前のものを、私たちがどのように捉えるか、ということから出発して、その先に、真理や普遍的なものが、私たちの主観的視点を通して得られていたのです。

このように考えるのが、現象学的心理学です。

「一般的にはこうなる」、「これはいい、これは悪い」などの判断を一切停止し、目の前の現象を、そのまま理解することを「現象学的態度」と言います。

その詳細や、手順は紙面の都合でお伝えできませんが、傾聴を勉強している私たちには、馴染みやすい態度だと思えます。

どこかで「現象学的心理学」の文字を目にしたら、一度覗いてみてください。

(K・Y)

